不定期刊行　　第491号　2013.07.17

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者　大西　浩
池田工業高等学校

今夏、後立山の残雪は多めです　池工夏山準備、針ノ木山行

14日、15日の両日を使い、池工山岳部の夏山準備合宿を行った。参加者は6名（3年１名、２年２名、１年３名）。山域は、予定では扇沢から針ノ木を詰め、種池まで縦走し、扇沢まで戻るという展望ルート。私のお気に入りのコースの一つでもある。予定では、そうなっていたのだったが、現実は・・・。

初日扇沢を8時30分に出発。梅雨明け10日のピーカンを予想してルンルンだったのだが、実際には扇沢では土砂降り。8時20分、出鼻をくじかれながらも、明日はよくなるだろうと意を決して出発。雨はそれほど激しくはない上に、降ったりやんだりで雨具を着るべきかどうか悩ましい。左岸の作業道を大沢小屋まで進む。5 月の雪上研修の時とは様変わりした大沢小屋の様子だが、生徒たちにはあまりピンと来ないようだ。9 時45分大沢小屋を出て、10時10分赤石沢を対岸に見る。ニッコウキスゲ、シラネアオイ、イワカガミ、初夏の花たちの出迎える中、雪渓尻に到着。まだしっかり雪がつながっている。生徒たちにはアイゼンを装着させた。春の残雪とはまた違う雪を味わってもらいたくて今回はここを選んだ。慣れぬ雪渓歩きとアイゼン歩行は生徒には予想以上に大変なようだ。生徒の喘ぎを横目にコーチの山内君と僕はノーアイゼンで軽快に登っていく。左右の岩質の違いを生徒に気づかせた山内コーチが破砕帯とフォッサマグナの話をしてくれる。景色を見たり、読図をしたりしながら徐々に標高を稼ぎ、11時40分「のど」を通過したところで一本とり、雪上の落石の怖さを教えたあとのことだった。

休憩を終えて歩きはじめて暫くしたころ、直径４０ｃｍほどの落石が猛烈な勢いで転がって来た。「ラーック！ラーック！」大声で周囲のパーティに伝える。我々の上部にも下部にもいくつかのパーティが取り付いていたが、幸いにも難を逃れた。一番狭いところだっただけに岩は我々のところに一直線に向かってきた。生徒の前で大きくバウンドし、一瞬肝を冷やした。やはり雪渓は怖い。実体験で生徒にもその恐ろしさが実感できた様子。そんな一幕もあったが、やがてマヤクボの分岐までくれば、稜線はもうすぐだ。

雪渓は結局どこも切れることなく、稜線まで続いていた。13時25分、針ノ木峠着。あいにく眺望はないが、明日に期待しよう。百瀬さんにキャンプ代を勉強してもらい、水代もただにしてもらった。ここはありがたくその心遣いをいただくことにしよう。生徒たちがいずれこの気持ちに報いてくれることだろう。ずっと小康状態だった空模様が悪化する前に幕営を終えたのはラッキーだった。テントの中で、お茶を飲み、一休みしていると少し雨音がし始めた。2時30分、今日の雨は前線が南下してきている影響である。3年生で一人参加したＳ君が、せっかく来たのだから「蓮華岳へ行こう」と下級生を焚き付ける。怪しい空模様ではあるが、雷のリスクはなさそうなので3時に蓮華に向けて出発。蓮華の直下花崗岩の中、見事なコマクサの群落。中に一輪、シロバナのコマクサを見つけた。しかし花をめでる間もなく、あいにく猛烈な土砂降りとなってしまった。昨日の寝不足か、やや体力のない1年生の足取りが心もとなく見えた。聞けば眠いという。低体温症の心配もあったので、4時08分頂上を踏んですぐにツェルトをからだ

に巻きつけて、下山させた。重篤なことにならなったのは、これも幸いであった。
　テン場に着いたのは17時。18時30分、二つのテントのそれぞれから「いただきます」の声が響き今日一日が終わった。夜半過ぎから猛烈な雨がテントを打ち、風も強くなってきた。予定では3時半起床、5時発であったが、とても撤収できるような天気ではない。長野県は梅雨明け宣言が出されてはいるが、梅雨前線がかなり南下してきているようだ。3時半、生徒には少し見合わせる旨指示を出す。このままの状況が続くようでも5時起床7時には出発できる体制を調えるよう指示を出す。しかし、5時の段階でも雨はおさまるどころか、ますます強くなる始末。ガスも出ており、視界も利かない。この段階で縦走は諦めた。午後は晴れる予想だが、この先の長丁場を考えれば出発時刻のこれ以上の遅れは致命的である。のんびり天候の回復を待って、針ノ木に登るのもまたよし。
　まだ天候は完全には回復していないが、晴れるのを祈りながら7時に針ノ木岳に向かって出発。山スキーでマヤクボを詰めるのは常だが、雪のない時期に登るのは一体いつ以来のことだろう。スキーでなら難なく下れる斜面も無雪期に見ると、大きくえぐれ様相は全く違う。途中、トラバースの箇所には3か所ほどの雪渓が残っていた。まだ高いところはガスに覆われているが、雨はあがり次第に視界も開けてきた。7時50分、頂上に到着。眼下の黒部ダムの景色が生徒たちには何よりのご馳走だったようだ。対岸の劔、立山はまだ顔を見せないが、正面のスバリの岩壁を縦走者が辿るのが見える。どちらにしても今日の行動はここまで、慌てることもない。せっかくなら周囲の山々が顔を見せるまで待とうじゃないかと、大休止。立山は見えてきたが、劔は大窓雪渓の下部は見えるが、なかなか頭までは見せてくれない。天候が回復し、風もなく穏やかな山頂でおよそ50分、チラリズムにフラストレーションを募らせながら、劔の峩々たる峰々をなんとなき拝んで下山。テン場につくと槍穂高に続く裏銀座の峰々が見えてきた。来月の夏合宿では穂高に行くぞと生徒たちの目的意識を喚起する。
　ゆっくり濡れ物を乾かして、10時30分に峠を出発。山内コーチと僕はノーアイゼン、生徒にはアイゼンを履かせた。マヤクボの大岩まで来たところで、僕らが雪上をノーアイゼンでスタスタ歩くのを見ていた6人の生徒のうち、3人の生徒が「アイゼン邪魔」と外した。残りの3人はつけたままだったが・・・。外した3人、しばらくはよかったが、「ノド」の急斜面のところまで来たところで、進退窮まり2人の生徒は全く歩けなくなってしまった。再びアイゼンをつける羽目になった生徒たちは「先生たちの技術はすごいわ！」と完全脱帽。そりゃ年季が違う。30年以上の歩行技術は伊達じゃない。
　12時20分、雪渓尻に到着。本来歩くはずだった縦走路が頭の真上にあり、青空をバックに聳えているのを見るのは少々癪に障ったが、しかし、生徒たちにとっては逆に夏の雪渓を下るという得難い経験ができたことは、あながち無意味ではない。アイゼンの歩行の際にも基本的な歩きの技術が大切と悟ってくれたことだろう。
　大沢小屋でトイレ休憩をしたのち、扇沢には13時50分に到着した。そんなわけで所期の目的とは少し内容は変わってしまったが、新チームになっての初めての合宿、夏山の涸沢合宿への準備としては、まあまあだったかな。
　蛇足ながら、冒頭の見出しにも書いたように、今夏後立山方面の残雪量はやや多めである。梅雨明けが早く、夏山シーズンの到来は早かったが、この山域への入山を考えて方々いる方々は十分な備えで安全な登山を心がけてほしい。僕らの大好きな山が「魔の山」などという汚名にまみれることのないように。